

大陸（満州）

関東軍軍属回顧

福岡県 大場 瀧蔵

私は昭和十三（一九三八）年七月中旬、久留米第十二師団司令部に従軍志願（軍属）し採用となり、新京の関東軍野戦兵器廠に七月二十七日午前九時出頭、ハラル野戦兵器廠に配属され、本部器材科に勤務し、工兵部隊の兵器の警備、復旧及び補給業務の担当になりました。

ちようどソ満国境の張鼓峰で日ソ軍の衝突がありました（昭和十三年七月九日）、損壊兵器の復旧補給に当たりました。工兵の兵器警備は十科に分かれ、坑道、爆

破、近接、化学、土工、木工、鍛工、架橋、鉄道、通信があり、関東軍命達予算の運用状況で補給警備、部品の補給事務をやりました。入廠当時の廠長は村岡豊陸軍少尉（終戦時ルソン島の第一〇三師団長）で、昭和十六年三月には森田広市少尉（終戦時内地、第二従軍兵器部長）に交代しました。兵器廠の課長は大佐、班長は大尉、補佐役に文官がおり同部屋で勤務しておりました。

昭和十四年五月にはノモンハン事件が起き、日本軍は敗戦処理で大多忙でした。私が軍属志望したのは二十七歳の時で、戦時色が日増しに濃くなってきた昭和十三年です。いずれ召集されるのは必至な時代でしたので、それなら少しでも早く軍関係に勤めた方が良くと思ったからです。兄も一緒に志願しました。

昭和十六年五月頃、関東軍特別大演習の名目で満州全域に大動員された兵隊、軍馬が満ち溢れ、兵器弾薬も貨車に満載され、対ソ戦の準備で大変でした。ところが昭和十六年八月に入ると、関東軍い号三号演習に変更され、関東軍保有の兵員、兵器、弾薬は中支軍兵器廠に移送されました。

その時、大型発動艇と称する舟艇一隻が行方不明となり帳簿上の在籍を消滅させたことがありました。小菅中尉と相談の上、極秘裏に決断処理したことは今も忘れません。

昭和十六年十二月八日、裏庭で銃剣術の訓練中（私は三段の腕前でした）に「訓練中止、営庭集合」の命により直ちに整列、たまたま来隊中の少将から「英米と開戦、真珠湾攻撃大戦果、シンガポールでは英海軍戦艦『プリンス・オブ・ウェールズ』及び『レパルス』の二隻撃沈す」との伝達があり、全身が躍動したことが思い出されます。

昭和十七年二月十五日、シンガポールを攻撃して間もなく鹵獲兵器としてブルドーザー一台が南方より送

られてきたことがありました。これを見本に大連の工場で作らせたのですが、その後の戦況悪化でどうなったか判りません。

昭和十七年六月五日のミッドウェー海戦で大敗北したことは知りませんでした。いつかは大勝利するのを夢見ていたのですが。しかし、関東軍の移動、兵器弾薬の移送が次第に頻繁になり、関東軍の戦力が次第に低下してゆくのが日常の業務から感じるようになりました。

昭和十七年七月、牡丹江に第一方面軍司令官として山下奉文が覆面部隊長として着任していましたが、相次ぐ関東軍の南方転出に「北の守りは知らんぞ」と嘆いたという噂が流れました。昭和十八年に入ると私ら軍属のヒソヒソ話の中でも「戦況は不利だ。貯金しても無駄だ。家族に御馳走を食わせて労ってやれ」などと言われるようになりました。

昭和十九年九月、各師団転出のため各兵器廠の撤退状況を把握確認するため、上野中尉と共にハイラル、チチハル、ハルビン等に出張を命ぜられました。孫

呉に在るはずの第一師団が行方不明のため（南方転出）事態の深刻さに危機感を募らせました。

国境守備隊、独立守備隊がすべて改編、師団編成に伴い南方転出相次ぎ、補充兵として在滿邦人の召集が全満で行われました。しかし兵隊の個人装備が正式な物が足りず不正式な物すらも不足する始末で、例えば水筒が竹の筒だったり、帯剣を吊るバンドが革から布（ズック）に代用される等、末期症状が見られるようになりました。それに加えて本土還送兵器業務に集中するようになり、コロ島の港や清津、羅津港からの積み出しが盛んになりました。

昭和二十年八月七日、ソ連軍が国境突破、満州にないだれ込んで来た時、兵器本廠と僅か道路一本隔てた閑東軍司令部は猫一匹おりませんでした。直ちに重要書類を焼却しましたが部厚い書類綴りはなかなか燃えず、焦る気持ちを静めるのが精いっぱいです。

八月九日夜、東新京駅より軍司令部を追って通化に撤退しました。通化駅にはなぜか絹布が山積みになり、ブドウ酒の箱も山積みで飲み放題、兵の中には腹

をこわす者も出る始末でした。

八月十五日、短波受信機の前に集合、初めて聞く天皇陛下の玉音をはじめは疑ったのですが、まさしく終戦のお言葉に田村大尉と話し合い、拳銃、ブラウン管を持って平壤へ脱出。その後平壤で武装解除を受け、九月、貨車に乗せられ二十二日間を要してカザフスタンの天山山脈を仰ぎ見るアルマアタ地区のグズウォールの収容所に入りました。

私は露語の教育を受けているのですが隠して、露語は出来ないことで通しました。下手に通訳なんかに使われると帰国が遅らされる恐れがありましたから。

抑留中の作業は運河掘りの土工事が主で、煉瓦作り、建築作業のほか農場へ行って芋掘り、苗植え等いろいろやりましたが、ジャガ芋掘りは一番楽しみにしたものです。帰りの外套の裾はジャガ芋でふくらんでいました。

食事は不足しており食べられるものは何でも口に入れました。作業に出ても空腹でたまらず、寝ていたら歩哨がどうしたかと尋ねるので腹が痛いといったら医

者にかかれと勧められました。医者に診てもらったら一カ月の休養と茶色の水薬をくれました。飯盒の蓋一杯の米のお粥とパン二切れとスープが一日の食事です。

帰国の道は二十四日間かかってナホトカへ、昭和二十三年六月二十六日「第一大拓丸」で舞鶴に帰りました。兄と一緒に志願して虎林の兵器廠に勤務していましたが、建物が未完成のため不衛生な生活をした上、ソ連に抑留され、シベリアで死亡しました。

軍関係の家族は平壤収容所に収容され、私の妻は三歳の長女をジフテリアで亡くしました。昭和二十年十二月三十日だそうです。帰国後一男一女に恵まれました。

余談ですが、昭和十八年八月頃、関東軍司令官梅津大将が野戦兵器廠本部を巡視でみえた時、私はドアの開閉係を命ぜられておりました。閣下が帰られる時、私がドアを開けると「ご苦労」の一声を残されて帰られたのですが、前に申し述べたように、その時は戦況不利、前途に不安を覚えていた頃です。私達下級軍属

の間でも「貯金するな、家族を労え」とささやかれていたのですから、閣下はすでに前途を見透かして、下級軍属の行く末を案じられ、「ご苦労」の一言に託して慰められたのではないかと推察している次第です。

奇なる哉、我が戦運

満州く内地

埼玉県 寺本 近造

私の徴兵検査の頃は、未だ支那事変も勃発していませんでしたが、世間は何か騒がしい時代でした。東北地方は冷害などのため、故郷を離れ都会に集まって職を求める者が男女を問わず多くいました。

私の家は当時埼玉県入間郡（今の入間市）で農業を営んでいたのですが、麦と芋を主としていましたから農業だけでは家計が成り立たなかったようです。三男の私は初めは父と一緒に農業に従事していたのですが、兄二人は所沢へ勤めに出ていたので、耕地六反